

「岐阜市いじめ自死事件真相解明調査委員会」に期待すること

解明して欲しいこと

1. 「いじめ防止基本方針」に基づく学校の組織的対応が、迅速になされなかったのは、なぜか。

2. いじめを止めるチャンスが何度もあったのに、見過ごされたのは、なぜか。

⇒「危機感」が共有されていなかったのではないか。

⇒なぜなら、学校組織外の関係者を交えた「いじめ防止等対策委員会」は、通常、年2回、開催されている。法施行後、数年たち、アンケート結果の報告などのみで、30分で終わるケースもあり、形骸化しているのは事実。

⇒「危機感」とは、「担任など教員」の目が届かない所で、いじめが起きている可能性のこと。これが認識されていたのか。

◎ チェックして欲しいのは、同委員会に「授業以外の学校生活」を垣間見られる、「事務や用務を担う職員、図書館司書など」が含まれていたのか、どうか。また、そうした「職員」が何を感じていたのかをヒアリングして欲しい。

◎ 同委員会に参加している地域の代表や外部委員が、どのような経緯で選任され、同委員がどのような認識を持っていたのかもヒアリングして欲しい。

◎ それを踏まえて、地域に開かれ、見守られる学校になるための方策を提言して欲しい。

3. 担任からの相談（報告）に、副主任はどのような対応・応答をしたのか。

⇒「対応・応答」は、双方向性が確認されていなければ、意味が薄くなる。「聞いた」つもり、や「話した」つもり、でことが進んでしまったのではないか。

◎ コミュニケーションには、「言語的」「非言語的」「態度・視線」という要素がある。そのことを踏まえた双方の「動き」を正確にヒアリングして欲しい。

4. 学校長のリーダーシップが、十分に発揮されなかったのは、なぜか。

5. 「学校生活アンケート」が、生徒たちの実態を正確に反映していなかったのは、なぜか。

6. いじめがなくせない（止まらない）のは、なぜか。

⇒「加害者」にも背景があり、「いじめ」も小さい頃からの蓄積であり、学習行動であるという認識が、関係者間で共有されていたのか。

◎ 情報の共有は、子どもたちの「今の状況」のみでなく、「加害生徒」においては、指導の際、「生育歴」や「生活歴」についても把握しておくべきだ。そうした情報の交換と収集、背景をどのように把握し、支援計画を立てていたのだろうか。

◎ 「加害生徒」というレッテル張りは、避けなければならないので、要保護児童対策地域協議会のプライバシー保護の方式を参考にするなど、福祉と教育の連携・協働を提言して欲しい。

7. 担任が行った「指導」は、どのような行為・行動、内容だったのか。

⇒従来から行われている、生徒に対する「指導」が「入らない」生徒が増えている、という認識や、それへの対応（指導方法の工夫・改善）がなされていたのか。

◎ 「指導」の具体的な中味、をビデオで再現するように、誰にでも分かるように記録・報告書に留めてもらいたい

◎ 報告書をまとめられる際に、曖昧語を使わないでもらいたい。

例えば、新聞記事でも活用されている「ささいなサイン」「きめ細かい情報交換」「十分に機能する」などの表記における、「ささいな」「きめ細かい」「十分に」などは、読む人によって、捉え方が全く異なるからだ。